

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：23601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660106

研究課題名(和文) 認知症グループホームにおける“なじみの場づくり”を促進するケア指針の開発

研究課題名(英文) Development of the dementia care to promote to feel familiar with their living environment in group home.

研究代表者

細田 江美 (hosoda, emi)

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号：10290123

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：認知症対応型グループホームにおいて、認知症高齢者がなじみのある環境で穏やかに暮らしていくために、ケアスタッフは“なじみの場づくり”を行うことを重要であると考え、またそのためにケアを提供していた。

特に大切としていたことは、「身体的な状態をきちんと観察し把握する」、「高齢者を尊重する」、「他者との交流を図る」、食事や洗濯など「基本的な日常生活行動がとれる」であった。

研究成果の概要(英文)：Care staff of the group home, was considered to be important that for elderly people with dementia go live in well-being in an environment that is familiar, to perform a "to feel familiar with their living environment".The thing that they were particularly important "assessing the present condition," "respecting the person," "promote interactions with others," "daily life basic actions can be carried out (laundry and prepare a meal etc...)" was.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：認知症高齢者 グループホーム なじみの場づくり

1. 研究開始当初の背景

認知症対応型グループホーム(以下、グループホーム)は、小規模で家庭的な雰囲気において、できる限りその人らしい生活が営める「なじみの場」となるように介護保険制度開始とともに在宅サービスの一つとして制度化され、その数は短期間に激増している。その背景には、急速な高齢化、世帯構造の変化に伴い介護を要する認知症高齢者の増加に対し、一定の効果が認められている。

しかし、様々な基盤を持ったグループホームが乱立し、教育体制や外部評価などの導入によりケアの質の確保に努めてはいるが、まだ、ケアスタッフの経験などに頼る部分が多く、ケア提供者のケアに対する不安や管理者の力量に左右されることも否めない。

また、認知症高齢者にとって、「なじみの場づくり」が重要だとされながらもグループホームにおけるその概念は曖昧で明確な研究はなされていない。今後、さらに多職種のケア提供者から構成されるグループホームの必要性が高まる中、ケア提供者がケアに対して不安を抱くことなく、ケアのよりどころとなる実践的な指針が必要と考えた。

2. 研究の目的

認知症高齢者が新しいグループホームという場になじみ、自分らしい生活を構築する過程において、ケア提供者が行う「なじみの場づくり」を明らかにし、現場で使用できるケア指針を作成する。これにより、設立主体の違い、多種多様なケア提供者から構成されるグループホームにおけるケアの質の確保、ならびにさらなる向上に貢献できることである。

3. 研究の方法

「なじみの場づくり」に対する認識と実践内容の把握

介護施設における入所者のニーズなど関連すると思われる文献の検討と調査項目の検討

健康高齢者(当大学にて開催している高齢者水中運動参加者から同意の得られた高齢者35名)から介護に対する思い、終末期への意向の聞き取りを通じて質的に分析し、調査項目への反映

近隣の協力を得られる高齢者福祉施設に自由記述にてなじみの捉え方についての基礎調査、また当大学に対し協力体制が得られるグループホームの介護責任者、看護職に対しプレテストを通じ、質問紙の内容検討と確認。参加スタッフは、資格等問わないが、介護看護責任者より認知症高齢者とよい関係が築けるまたは築こうと意識が高いスタッフを紹介してもらい、本人同意を得て行なった。

前記の結果より質問調査項目を検討し、質問紙を作成。独立行政法人福祉医療機構の運営するワムネットの介護事業者情報

により登録されたグループホームのうち、施設名および住所の確認できた全国の11,292施設より、無作為に5000施設を抽出し、無記名式質問紙を送付した。

調査期間:2013年11月~2014年1月

1,067施設より得られた(回収率21.3%)については項目ごとに記述統計量を算出した。調査内容は以下の項目である。

- ・所属施設について
(所在地、開設年、ユニット数、定員、経営母体、併設施設、多機能化の実施状況)
- ・利用者状況について
(入居者数、属性、年齢構成、介護度)
- ・職員の勤務体制および配置人数、理念
- ・調査対象者の属性、経験
- ・「なじみの場づくり」のためのケアとして、感じている重要度とその実際48項目
- ・IADLを含む日常生活行動の12項目

倫理的配慮として、研究協力者と所属施設に対し、個人や施設の匿名性の厳守、研究協力の自由、協力の有無による不利益はないこと、職務評価との独立性、データの管理等についての保証を行なった。

4. 研究成果

(1)「なじみの場づくり」に対する認識と実践内容の把握

看護・介護学領域で主に使用されているテキスト10冊を概観し、「なじみの場づくり」、「なじみ感」、「なじみの関係」などの概念についての記載をみた。認知症ケアをおこなうための重要なケアであることは記載されていたが、その言葉の持つ意味や具体的方法等の記述は見られなかった。さらに、医中誌において「なじみ」「認知症」「看護」などをキーワードに検索したが、その多くは様々な「なじみ」を手段にして効果を得られた事例報告が多く、その意義の重要性を説いていたが、そのケアの方法や過程は明らかにされていなかった。また、グループホームにおける「なじみ」そのものに着眼している研究は見当たらなかった。

健康高齢者に対し、終末期に向けての意向
男性12名、女性20名、平均年齢74.3(±5.0)独居5名、夫婦のみ14名、2人暮らし1名、3人以上10名、ケアハウス2名であった。分析の結果、【具合の悪いときは、自分を気にかけてほしい】【専門職の手を借りつつ、家族に面倒を見てもらう】【家族には地獄のような介護はさせたくない】【1人になったら施設に入るしかない】【認知症になるのは不安で嫌だ】【終末期は人とふれあいたい】【人生を自分らしく生きたい】などが抽出された。人生を施設に入所したとしても自分らしく生き抜き、人とのふれあい、他者に迷惑をかけたくないとの意向がみられた。

また、水中運動へ参加継続する理由とし

て、友達ができる、健康が維持できる、心が解放されるなどの回答がえられ、運動の目的のみの理由で参加をしていなかった。

当大学近隣の協力を得られたグループホーム4施設6名および老人保健施設7施設39名に勤務するスタッフが捉えていた“なじみ”のある状態とは、【自分の存在価値を感じながら自らの意思で行動できる】【他者との関わり】【安心して心穏やかに生活できるような状態】であった。

(2) グループホームにおける認知症高齢者の“なじみの場づくり”に関する調査より

施設の概要

分析対象1,059施設のうち1または2ユニットで運営している施設が全体の95.8%を占め、定員数は1ユニットあたり平均8.9名であった。経営母体については、株式会社が最も多く(48.1%)、ついで社会福祉法人(26.3%)、医療法人(16.6%)、NPO法人(6.6%)、社会福祉協議会・地方公共団体及びその他(1.2%)であった。また、併設施設としては、単独型が最も多く(42.9%)、併設している施設として多いのはデイサービス、特別養護老人ホーム、訪問介護、病院・診療所であった。

利用者の状況(平成25年10月)

入居者数:平均1ユニットあたり8.7人(男性2.9人、女性12.5人)であり女性が男性に比べて多かった。平均年齢は85.6歳、要介護度は要介護3が最も多く、全体の27.5%を占め、次いで要介護2、1、4、5の順であった。これは、現在報告されている全国平均と近似であり全国の状況を反映していると考えられた。

職員体制

日勤帯(おおよそ9-18時)の勤務職員数は平均3.3人、夜間帯は1ユニットあたり1.1人でケアを担当していた。看護師配置については、45.7%の施設で配置していたが常勤換算1以上の有無で見ると、約半数の24.4%となる。

調査対象者の概況

平均年齢47.8歳±11.21、女性約7割と多かった。また、94.5%が管理者、ケアリーダーとして職務に携わり、所有している資格としては、介護福祉士(43.7%)、ケアマネジャー(33.9%)、看護師(5.2%)、准看護師(1.9%)その他であった。ケア実践年数は13.2±6.7年、現在の職場での年数6±3.4年、認知症ケアにかかわった年数は10.6±5.3年であった。

ケアスタッフがとらえている「なじみの場づくり」のためのケアとして感じている重要度とケアの実際

グループホームにおける“なじみの場づくりの重要性”については、99.7%が重要であると考えられていた。

ケア項目においては、大きく分けて【今の状態をアセスメントする】【生活行動の達成を支える】【入所者への悪影響を予防する】【その高齢者を尊重する】【慣れ親しんだ対話をする】【生活に笑いや楽しさを取り入れる】【他者との関係を調整する】【人生で培われた強みを引き出す】の項目で見ると、“なじみの場づくり”において重要と考えていたのは、【今の状態をアセスメントする】(99~99.5%)であり、その内容としては、「日常生活の中での表情や顔色の変化」 「いつもと違う時の意識や顔色の確認」 「認知機能の変動の観察」 「不安の程度や原因の把握」 「意向や好みの把握」であった。

また、【その高齢者を尊重する】(89.7~95.2%)においてもケアスタッフは重要であると考えていた。

逆にあまり重要とできていなかった項目としては、【人生で培われた強みを引き出す】内の「その高齢者にとって少し難しいと思うことをあえて提案してみる(54.8%)」 【他者との関係を調整する】内の「入所者同士の争いが起きた場合はお互いの姿が見えないようにする(62.2%)」 【生活行動の達成を支える】内の「生活上できないことを目の前で代行する(52.5%)」であった。

意識して、ケアを行っているかについては、ほぼ、ケアスタッフが感じている重要度と提供されているケアは比例していたが、重要と考えているにも関わらず、ケアが提供できていないとしていたのは、「得意なことを人前で披露する機会を作る」 「本人の望むペースでケアを行う」 「高齢者の好きな活動が継続してできるように一緒に行く」であった。IADLの日常生活行動についてみると、【他の入居者や、訪問者と交流できる】(98.5%)、【余暇時間を好きなように過ごすことができる】(98.2%)、【地域住民と戸外で交流できる】(94.9%)などの他者との交流を重要であると考えられていた。

また、【食事の支度ができる】(94%)、【簡単な洗濯や干すことができる】(93.6%)など、生活活動の基本事項を重要と考えていた。これらのことは、グループホームの役割や特性から考えると妥当であると考えられる。しかし、【小銭の金銭管理】(63.3%)、【付添の手を借りて公共の乗り物やタクシーを使い外出できる】(66.1%)、【準備されていれば服薬できる】(71.1%)は、ほかの項目に比べて低い傾向にあった。他者との交流、生活活動の基本事項においても、【適切な場所で失敗することなく排泄ができる】以外の項目においては、行っている率がすべての項目において下回った。

グループホームにおいては、入所者の高齢化、重度化が、戸外への外出や金銭管理、さらに可能性を引き出すケアへのチャレンジ

などに影響を与えている可能性があると考えられる。

また、終末期の対応と課題が様々な要因によって影響を受けているように、経営母体やグループホームの理念、ケアスタッフの構成などの観点から今後、より詳細に分析していく必要があると考える。

本研究において、ケア指針の開発までいたらなかったが、ケアスタッフがどのように“なじみの場づくり”をとらえているかを概観することができた。今後、さらに分析を進め実用性のあるケア指針の開発へと進めていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

細田江美、太田克矢、千葉真弓、曾根千賀子、松澤有夏、北山秋雄、那須裕、渡辺みどり、大学における高齢者水中運動講座への取り組み、身体教育医学研究誌、査読有、Vol.14、2013、pp.27-34、

細田江美、千葉真弓、渡辺みどり、松澤有夏、曾根千賀子、グループホームにおける終末期ケアの取り組み状況と課題(第2報)、日本看護福祉学会誌、査読有、Vol.19.2013、pp.63-75、

〔学会発表〕(計 3 件)

森野貴輝、千葉真弓、渡辺みどり、曾根千賀子、細田江美、北村育子、男性の要介護および終末期における医療と生活に対する希望、日本赤十字看護学会学術集会、2012年6月16日~17日、長野県看護大学(長野県駒ヶ根市)

曾根千賀子、渡辺みどり、森野貴輝、松澤有夏、細田江美、北村育子、千葉真弓、高齢者の要介護および終末期に対する意向、日本老年看護学会第17回学術集会、2012年7月14日~15日、金沢歌劇座・金沢21世紀美術館(石川県金沢市)

曾根千賀子、細田江美、新實夕香理、高齢者の要介護および終末期に対する意向、日本看護研究学会第39回学術集会、2013年8月22日~23日、秋田県民会館(秋田県秋田市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

細田 江美 (HOSODA, emi)
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号：10290123

(2)研究分担者

千葉 真弓 (CHIBA mayumi)
長野県看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：20336621

(3)連携研究者

渡辺 みどり (WATANABE midori)

長野県看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60293479

(4)連携研究者

曾根 千賀子 (SONE chikako)
長野県看護大学・看護学部・助教
研究者番号：40336623

(5)連携研究者

松澤 有夏 (MATHUZAWA yuka)
長野県看護大学・看護学部・助教